様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３５５０５
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１４１４０

研究課題名（和文）児童養護施設の文化構築に関する教育社会学的研究―職員と保護者の交流に着目して―

研究課題名（英文）Research of educational sociology on the construction of culture at the child protection institutions: Focusing on the interaction between staff and parents of children

研究代表者
山口　季音（Yamaguchi, Kioto）

至誠館大学・現代社会学部・准教授（移行）

研究者番号：７０７７４２３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の成果は、第１に施設の支援において、「親」は避けられないものでありながら、結果の良し悪しが想定できない未知の要素として組み込まれていることを明らかにしたこと。第２に児童養護施設内の教育環境における家庭の影響を明らかにしたこと。第3に職員による「家族関係の再構築実践」の一例として、施設職員が親に何を伝えようとしているのか、その詳細を明らかにしたこと。最後に、施設職員の実践を左右するものとして「措置の時期」について考察したことである。これらを通して、「施設と家庭での教育観のすれ違い」と「子どもが措置される年齢」が、施設の文化構築を職員が想定するものとは異なるものとしていることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の成果の意義は、第１に、「家庭で暮らせない」子どもの生活に着目し、その生活の場の一つである児童養護施設の文化に迫った点である。第２に、施設内の枠のみで捉えられている施設文化の構築を「子どもの保護者」と職員との交流に着目して捉えた点である。
　これらの検証を通して、学校や家庭とは異なる子どもの育ちの場に関する知見を蓄積するものと期待される。また、児童養護施設研究においても、家庭支援の実際を職員の実践と主観的世界と結びつけ、具体的な事例を提供することで貢献できる。さらに、施設職員の支援実践を描くことで、日本における社会的包摂の有り様を議論するうえでの一助になることが期待される。

研究成果の概要（英文）：The results of this research are, first, that it revealed that the presence of "parents" is an inevitable but unknown element incorporated into the support of the institution. Second, the influence of the family on the educational environment within the institution was clarified. Third, as an example of "family relationship reconstruction practice" by the staff, I clarified the details of what the staff is trying to communicate to the parents. Finally, it was the consideration of the "timing of measures" as something that influences the practices of the staff. Through these, I pointed out that the cultural construction of the institution differed from what the staff assumed, due to differences in the institution's and parents' views of education and the age of the children admitted to the institution.

研究分野：教育社会学

キーワード：児童養護施設　家庭支援　子ども

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の主たる背景をなす研究領域は、①「児童養護施設の文化」研究と、②「貧困と家庭支援」研究である。

「児童養護施設の文化」研究においては、児童養護施設の施設文化の構築や伝達に関する研究は数少ないうえ、その中でも職員と家庭・保護者との交流が有する役割にはほとんど関心が払われていない。しかし、子どもの養育や教育を行ううえでその家庭を切り離すことはできず、保護者との交流が施設職員の養育観や教育観に影響を与える可能性は十分にある。先行研究では、児童養護施設における文化伝達に関する研究において、職員が家族と交流することで家族観が変容していることを指摘している（山口 2019）。近年、児童養護施設など社会的養護の場での子どもの生活課題に注目が集まる中、個々の施設への理解を深めるためにも施設における文化や支援の構築のプロセスを解明する必要がある。こうした観点で施設内の職員の支援実践を分析することで、児童養護施設がいかにして家庭が異なる子どもたちの生活の場を支えているのかを明らかにしつつ、そのための課題への対策の手がかりにつなげられるだろう。

「世代間連鎖と家庭支援」研究においては、児童養護施設職員の実践は虐待や貧困の世代間連鎖を防止する援助の実践として注目される。すでに子どもにかかわる貧困の研究が明らかにしているように、虐待や貧困の世代間再生産を食い止めるためには子どもの保護者・家庭に対する支援が不可欠である。しかし、児童養護施設の家庭支援については、援助方法のプロセス等の研究はなされているが（たとえば、菅野恵 2017）、施設職員の社会的背景も含めた形での詳細な質的分析はほとんどない。家庭支援は、単に職員が保護者をサポートするものではなく、時に職員と保護者の間で養育に関する価値観が衝突する場合もある。そのような価値観の調整においては、施設の方針とともに職員自身の価値観が大きく影響すると考えられる。貧困や虐待などによって子どもと暮らせない事態に至った保護者に対する支援こそ問題防止を議論するうえで重要であり、児童養護施設職員の家庭支援の実践に期待される役割は大きい。家庭支援の詳細を描くことで、世代間連鎖を防止するための支援の姿勢や実践の在り方への理解を深め、新たな支援実践の構築を模索する手掛かりとなるだろう。

以上、本研究は、これらの課題を分析することによって、「児童養護施設はいかにして生活の場になっているのか」という問いに取り組むものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、児童養護施設に調査を実施し、施設における文化や支援の構築のプロセスを、職員と子どもの保護者との交流に着目した質的な分析によって明らかにするものである。

この調査研究によって、一方で、施設文化や支援の構築に子どもの家庭の文化がどのように結びついているのかを明らかにする。他方で、職場の枠のみで検討されがちな児童養護施設職員の「家庭・保護者支援」の実際を施設職員の主観からも検証する。

これらを通して、児童養護施設がどのような意味で子どもや職員にとって「私的な場」となっていくのかを明らかにする。最終的には、子どもと家庭双方との交流・支援を通して、児童養護施設における世代間連鎖を防止する実践が生み出されるのかに迫ることを目指す。

３．研究の方法

本研究では、国内外の児童養護関連および家庭支援関連の文献調査を平行して行いつつ、児童養護施設における調査を実施した。

文献調査については、児童養護施設職員に関する調査研究、職員の実践報告など既存の文献を詳細に調査分析し、家庭支援についての問題関心やその位置づけを把握した。この調査は、実際の施設での調査で得られたデータを解釈する際にも活用した。

続いて、本研究の主目的である児童養護施設の調査については、当初、個人の職員に対する調査を想定していた。それは筆者のこれまでの調査経験から、多くの施設職員の協力が見込めていたからであるが、一方で、施設が全面的に協力していただけるかどうかの見込みは立っていなかったこともあった。しかし、実際に調査のための協力者の選定を開始した 2019 年度、幸運なことに近畿圏にある A 学園から全面的な協力を得ることができた。

こうした経緯から、本調査では方針を転換し、調査人数を多くするのではなく、一つの施設で家庭支援に関わる職員に限定し、継続的に複数回インタビュー調査を行うこととした。また、その際には職員のライフヒストリーを聞き取るとともに、施設での業務の課題や進捗の実際を聞き取っている。このような経緯から、当初想定していた調査以上の成果を挙げることができた。

調査協力者の選定は、家庭支援の業務には深く関わっていることを一つの基準とした。子どもの親と関わることはどの職員でも経験するが、家庭支援の実践を言語化するには、子どもだけではなく親の様子も含めてある程度俯瞰的にみることができる立場の必要があると考えられるからである。

インタビューにおいては、協力者の同意を得たうえで内容をすべてＩＣレコーダーに録音し、

逐語録を作成して分析を行った。質問の内容は主に、「協力者の施設外部での経験」（定位家族、学校および現在の生活状況）と、「児童養護施設での経験」（家庭支援を中心に仕事内容、勤務施設の状況・方針、子どもとの関わり）、「主観的世界」（養育や教育意識、階層意識、ジェンダー意識、施設職員としての展望）という大きく３つで構成している。

４．研究成果

本研究では児童養護施設職員と保護者との交流の観点から、施設における文化や支援の構築を考察し、以下の点を明らかにした。

第１に、親・家族が支援に与える影響以前から児童養護施設の子どもの多くは親などの家族がおり、養育できる状況でないために児童養護施設に措置されている。児童養護施設の支援も、子どもが施設生活の中で一時帰宅する際や退所後の親とのかかわり方もふまえた支援を考えていなければならない。しかし、職員が子どもが親から受ける影響をコントロールすることは困難であるし、交流によって親の変化を期待することもまた困難であり、支援の前提とすることはできない。施設の支援にとって「親」の存在は、避けられないものでありながら、結果の良し悪しが想定できない未知の要素として組み込まれていた。

第２に、児童養護施設の環境や実践の中で、家庭の影響が色濃く出るものとして、施設内の教育環境を挙げることができる。施設措置以前の家庭環境が、多くの場合子どもが学習意欲や関心を育むことができる環境ではなく、学校にうまく適応することが難しく、それが子どもの気持ちを不安定にさせてしまうことは既存の研究で指摘されている。他方で、施設措置後の子どもと家庭との関係が、施設が想定しているような教育環境の構築を妨げていることもうかがえた。

第３に、職員による家族関係の再構築実践である。子どもが施設に措置される要因は様々であるが、措置されたからといって、親の行動や子どもとの関係が改善されることはほとんどない。施設職員の家庭支援の一つとして、子どもと親との関係を再構築する試みが挙げられる。本研究では、こうした「家族関係の再構築実践」の一例として、施設職員が親に何を伝えようとしているのか、その詳細を明らかにしている。

最後に、措置の時期である。上記で明らかにした施設職員の実践を大きく左右するものとして、「措置の時期」を挙げることができる。つまり、子どもが比較的早い時期に一時保護されたのか、中学生や高校生になるまで家庭で過ごしていたのかによって、子どもと家族との関係は課題の質が異なる傾向があり、したがって施設職員の支援も様相や悩みが変化していた。

これらの結果を通して、本研究では、児童養護施設職員の保護者との関係の中で実践する家庭支援の様子を詳細に明らかにした。また、一方で、「施設と家庭での教育観のすれ違い」と、「子どもが措置される年齢」が、施設の文化構築を職員が想定するものとは異なるものとしていることを指摘した。

**参考文献**

菅野恵（2017）『児童養護施設の子どもたちの家族再統合プロセス ― 子どもの行動の理解と心理的支援』明石書店

山口季音（2019）「児童養護施設職員の家庭支援を通じた意識変容」『至誠館大学研究紀要』第 6 巻 27-37

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山口季音 | ４．巻<br>9 |
| ２．論文標題<br>児童養護施設の家庭支援における家族関係再構築の実践 | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>至誠館大学研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>35-44 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山口季音 | ４．巻<br>10 |
| ２．論文標題<br>児童養護施設の進路支援とその課題 | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>至誠館大学研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>81-89 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山口季音・田中浩二・梅木幹司・岡崎祐介 | ４．巻<br>10 |
| ２．論文標題<br>教職課程において伝達される現代の社会問題 ： 科目「教育原理」に着目して | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>至誠館大学研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>171-177 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>山口季音 |
| ２．発表標題<br>児童養護施設の家庭支援における職員の保護者理解 |
| ３．学会等名<br>日本子ども社会学会第26回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山口季音 |
| ２．発表標題<br>児童養護施設職員の家族関係再構築に対する意味づけの変容 |
| ３．学会等名<br>第72回日本教育社会学会大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山口季音 |
| ２．発表標題<br>児童養護施設における教育環境の構築過程 |
| ３．学会等名<br>第73回日本教育社会学会大会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山口季音 |
| ２．発表標題<br>児童養護施設の進路支援における困難 ―子どもの家族関係に着目して― |
| ３．学会等名<br>日本教育社会学会第74回大会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山口季音 |
| ２．発表標題<br>現代日本における社会的養育の展開 ―児童養護施設の養育と家庭支援に着目して― |
| ３．学会等名<br>令和4年度 九州教育社会学会研究会 |
| ４．発表年<br>2023年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|